

# 子ども体験を共有する社会を

岡山県社会教育委員の会議 議長  
 (山陽学園大学 副学長)

濱 田 栄 夫



季節は「山笑う」から「山滴る」へと移り、樹木の緑が一段と生気を放つ。私たちの人生を一本の樹木の生長にたとえるならば、子ども時代の大部分は幹や枝葉や花ではなく、大地の中に深く張りめぐらされる根にあたるだろう。成人は一人で行動したり、生産したり、創造したり、社会生活の一部を担当したりして、その存在感を高め維持していく。しかしながら社会の風雨にさらされても、その存在感を持続していくためには、子ども時代に固有な体験によって張り巡らされる根が、しっかりと大地をつかみ成長し続けなければならぬ。

子ども時代は思春期で終わるとしても、樹木の根が生長を続けるように、成人になってもひとりひとりの無意識の層では、幼児期から続く子ども体験が持続的に保持される。主観と客観の未分化状態から、家族や地域の中で一日一日と積み重ねられる子ども体験は、それが安定した確かなものであればあるほど、私たちの心身のメカニズムの中で保存され生

き続ける。家族の名前をすら忘れる高齢者が、自分の子ども体験を生き生きと語り、童謡を正確に歌えたりするのもそのためである。

イギリスの児童文学者フィリパ・ピアスは『トムは真夜中の庭で』(1958)の中で、主人公が住む部屋の上の階にいる老婦人が夢の中で描き出す子ども時代の情景の中に、下の階に住む少年トムが真夜中に部屋を抜け出して入りこみ、少女に戻った老婦人と出会う物語を描いている。そのファンタジー作品の後書きでピアスは、老人に子ども時代があったことは子どもにとって信じがたいことのように思えるが、私たちはみんな自分の中に子どもを持つていることを書いてみたかったと述べている。子ども体験をしっかりと心身のメカニズムの中に刻みつけることは、ひとりひとりの人生を社会の中で貫徹させると同時に社会を持続させるために重要なことである。子どもを核とする地域社会づくりが、地域再生のためにも強く求められる。